

沿岸地域遺跡分布調査概報（Ⅱ）

～宮古・八重山諸島編～

平成21（2009）年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

Introduction

はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターでは平成16年度より「沿岸地域遺跡分布調査」を実施しております。その成果として、平成17年度には「沿岸地域遺跡分布調査概報（Ⅰ）～沖縄本島・周辺離島編～」を刊行致しました。今回は続編として宮古・八重山諸島編の概要を報告致します。

沖縄県は東西に約1,000km、南北に約400kmの海域に連なる大小様々な島で構成されている島嶼県です。日本で唯一の亜熱帯地域として、本土では見られない多くの特徴を有しています。サンゴ礁に囲まれた海は世界有数の美しさとされ、世界中の人々を魅了しています。海に関連した観光産業は、いまや沖縄県にはなくてはならない重要産業のひとつであります。一方で、リゾート開発や大規模な埋立・護岸工事が盛んに行われており、砂丘や干潟等の旧地形が失われ、沿岸地域の遺跡保存も問題となっていることも事実です。

沖縄県は先史時代より海を重要な生業の場として利用し、琉球王国時代は海を媒介とした交易で未曾有の繁栄を謳歌してきました。したがって沿岸部の海域には多くの遺跡が存在することが想定されています。ユネスコでは2009年1月2日「水中文化遺産保護条約」が発効され、水中文化遺産の保護と活用は世界が共有する課題となっております。このような社会情勢の中で、当センターでは、沖縄県内の水中文化遺産の分布状況や内容を把握することも当事業の重要な一環と考えております。先島地方の調査でも、数多くの水中文化遺産や魚垣・石切場跡等の生産遺跡を確認いたしました。

本報告によって多くの方々に沖縄県の水中文化遺産について知っていただくとともに、埋蔵文化財の保護と活用について関心を持っていただければ幸いに存じます。

平成21（2009）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 名嘉政修

Inethod of investigation

調査の方法

この調査は、まず文献や聞き取り調査による情報収集から始めます。得られた情報を基に遺跡が存在しそうな地域を絞り込みます。次は、実際にその地域の踏査を行います（写真1）。踏査の結果、海岸に石切場跡、塩田跡、魚垣跡等の生産遺跡を確認することができれば、GPSでの位置記録や写真撮影を行います。また、陶磁器などの遺物が確認できた場合は、その付近の海底もあわせて調査し、海底にも同様に遺物散布が確認できた場合は同じようにGPSで位置を記録します（写

真2、3）。状況によっては、計測や実測をすることもあります（写真4）。その後、散布状況等の写真撮影をします（写真5）。古港も歴史的に重要な場所であることから、現状を確認する目的で写真を撮影しています。

分布調査によって、海岸や海底に遺物が散布する場所、沈没船、石切場跡、塩田跡、魚垣跡等の生産遺跡、古港の状況等が少しずつ集成できています。



写真1

実際に現地での踏査を行います。遺物散布地や石切場等の遺跡が確認された場合は、位置を地図やGPSで記録し、現況の写真撮影も行います。

写真2

海底でも遺物の散布が確認された場合は、目標物の真上にブイ（浮き輪）を浮かべて、GPSによって位置記録を取ります。



写真3

足がつかない深さになると、遺物の位置を示す人と、海上でGPSを操作する人に分け、連携を取りながら位置を記録します。



写真4

場合によっては、潜水した状態で目標物の計測や正確な実測図を作成します。

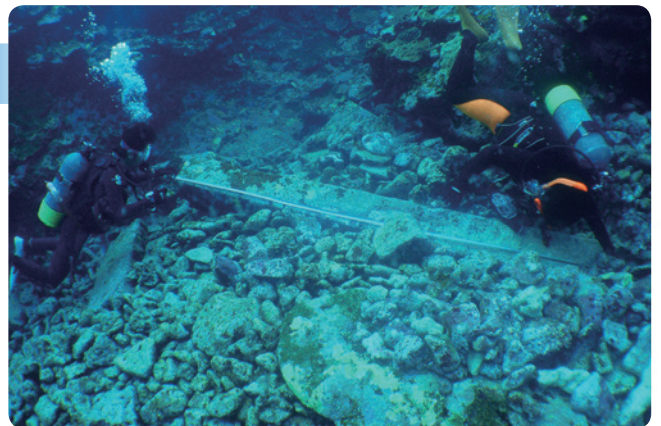


写真5

最後に写真撮影を行います。水中での撮影は防水ケースに入れた普通のカメラを使います。陸上と環境が異なるため、水中撮影に関する知識や技術が必要となります。



海底から回収した遺物の処理

海底から回収した遺物には、サンゴ、貝、藻などが多量に付着しています。この状態では、遺物の形・色・文様などの詳しい特徴を読み取ることが困難なため、付着物を取り除く必要があります。これらの付着物は剥がすことが難しく、無理に剥がすと遺物を傷付ける可能性が高いため、薬品を道具と併用しながら、少しずつ落としていきます。

海底から回収した遺物は現地ですばやく水に浸し、塩抜きを行います。



センターに搬入後、本格的な処理を始めます。付着したサンゴや大きな石灰を竹ベラや工具で丁寧に根気よく取ります。



これ以上削り取ることは困難と判断した場合、水で薄めた塩酸に浸し、頑固に残っている付着物を溶かします。



それでも落ちにくい付着物は、塩酸で部分的に落としていきます。



付着物をきれいに落とした後は、最後の処理として再び長時間水に浸し塩酸を抜き取ります。



Before—処理前の遺物

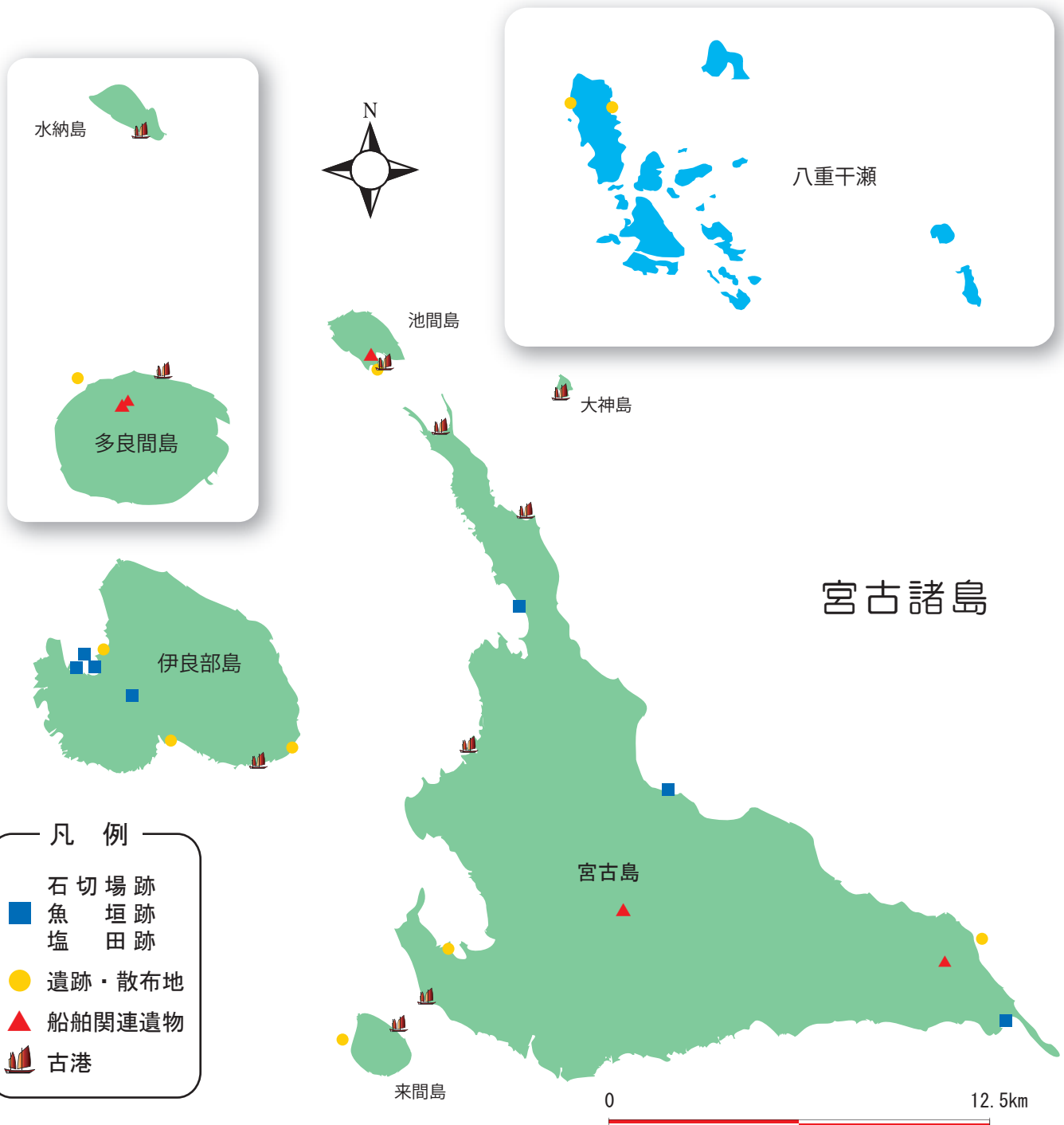


After—処理後の遺物

沿岸の文化財マップ

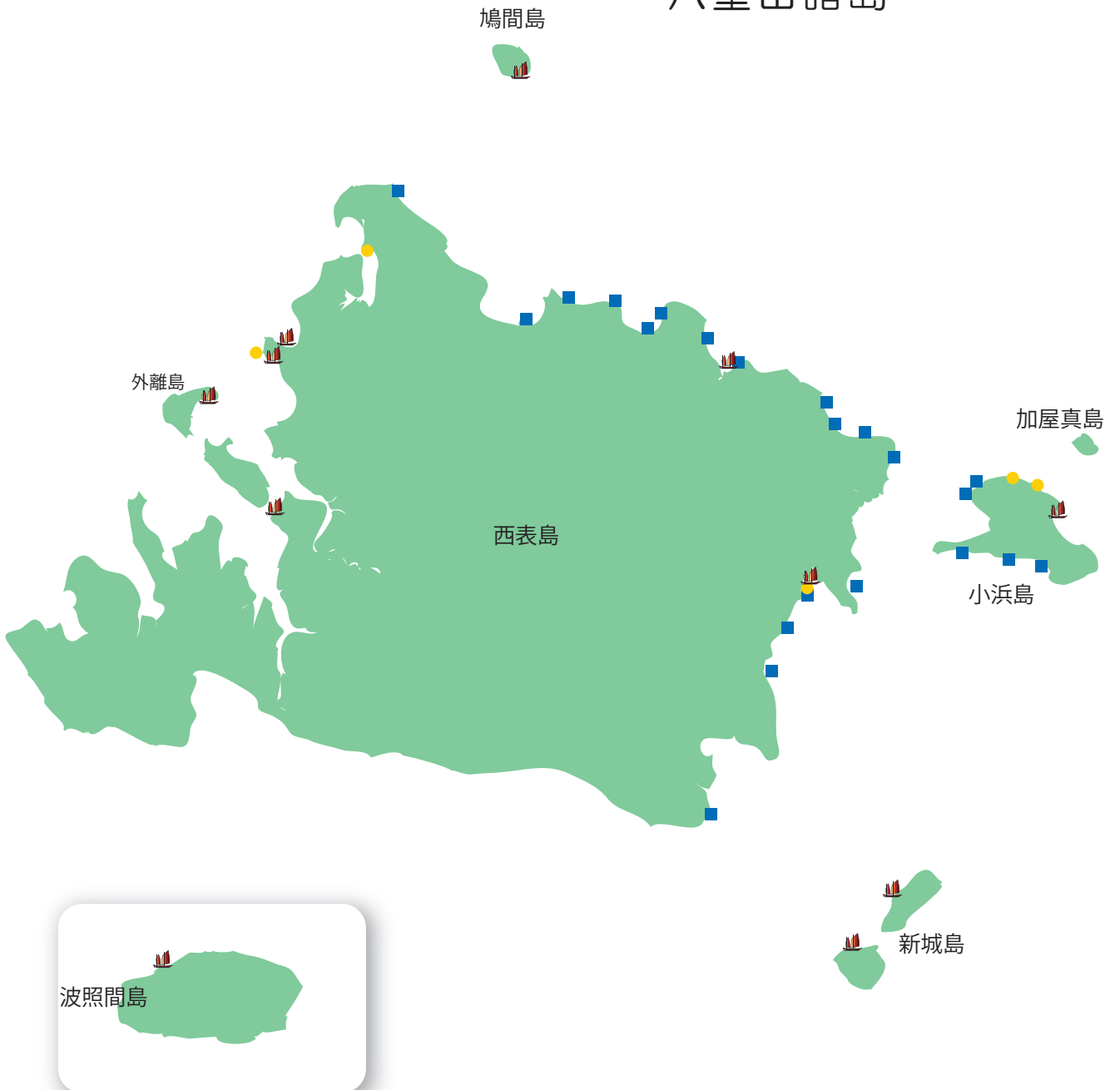
分布調査の結果、沿岸地域には現在までに以下のような場所に対象の文化財があることがわかっています。

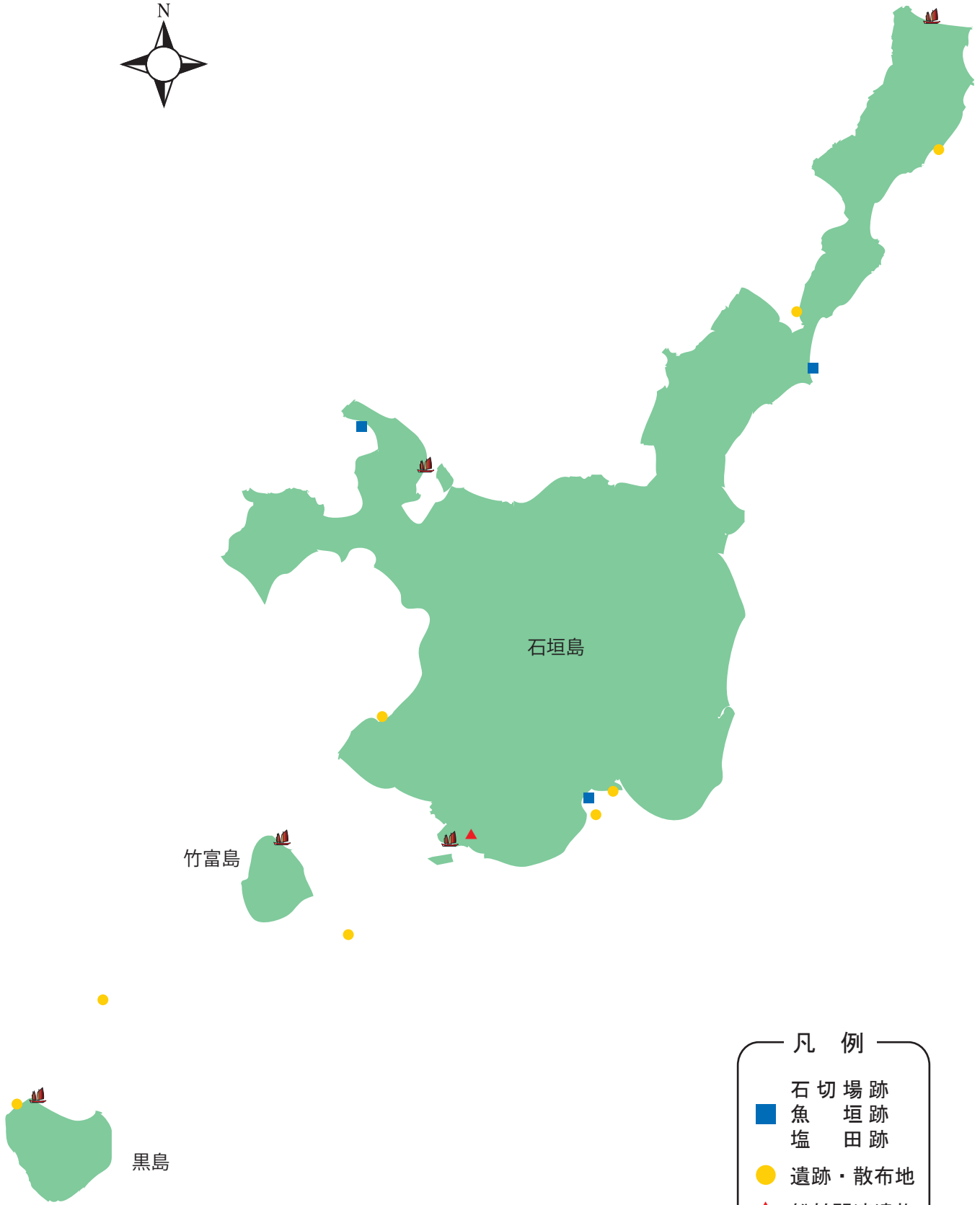
- 遺物散布地等の遺跡がある場所を表しています。
- ▲ 陸上に引き揚げられ、構築物やモニュメント等に転用されている船舶関連の遺物がある場所を表しています。
- 石切場跡・塩田跡・魚垣跡等の生産遺跡がある場所を表しています。石切場跡はビーチロックの精製される場所に集中し、塩田跡・魚垣跡は遠浅の場所に限られています。
- 🚢 『正保国絵図』に記載されている古港や、「唐船グムィ」等と呼ばれる伝承がある場所を表しています。





八重山諸島





凡 例

- 石切場跡
- 魚 垣跡
- 塩 田跡
- 遺跡・散布地
- 船舶関連遺物
- 古港

0 12.5km

海底の遺跡

沖縄県の海岸や海底には、多くの遺物が散布している場所があります。遺物の種類は様々ですが、グスク時代以降の陶磁器が多いようです。現在の成果では12世紀以降の中国産陶磁器から、近世・近代の沖縄産陶器まで様々確認され、年代幅もあります。

陶磁器が海底に散布する理由の多くは、船による品物の流通に関連すると考えられます。沖縄は1372年の中山王察度による明への進貢が始まったことを契機として、海洋王国の歴史を歩み始め

ます。また、それ以前から海外との交易があったことが、陸上の遺跡でわかっています。沖縄近海には貿易船を始め多数の船舶が航行していたことでしょう。当然、船の中には海難事故に遭遇し沿岸海域で座礁・沈没したもの、座礁・沈没はまめがれたものの、積荷の投棄を余儀なくされたものもあるでしょう。この結果、船そのものや積荷が海底に存在することになったと思われます。「海底にある遺跡」も認識し、保護していかなければなりません。

吉野海岸沖

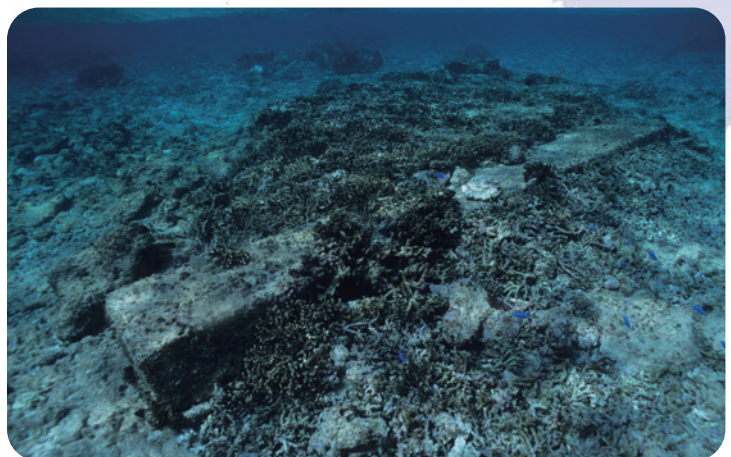
吉野海岸は、宮古島の東に位置しています。現在は観光客で賑うビーチとして有名ですが、その海岸に近世陶磁器等が散布しており、海岸・海底には多量の方柱状や板状の石材、数点の銅板が散布している状況が確認できました。石材は建築資材として運搬されていたと考えられます。

文献では、1853年に英国国籍の船が宮古新城村の海岸に漂着・座礁し撃砕したと記録があります。聞取調査でも吉野海岸に19世紀中頃に座礁した外国船（地元ではオランダ船と呼ばれている）にまつわる話がありました。文献記録・聞取調査との関連性があることから、海岸・海底の遺物は、この時に座礁した船の部品・積載品だった可能性が高いと考えられます。



吉野海岸遠景

吉野海岸です。リーフ内から沖にかけて多量の石材が確認できました。



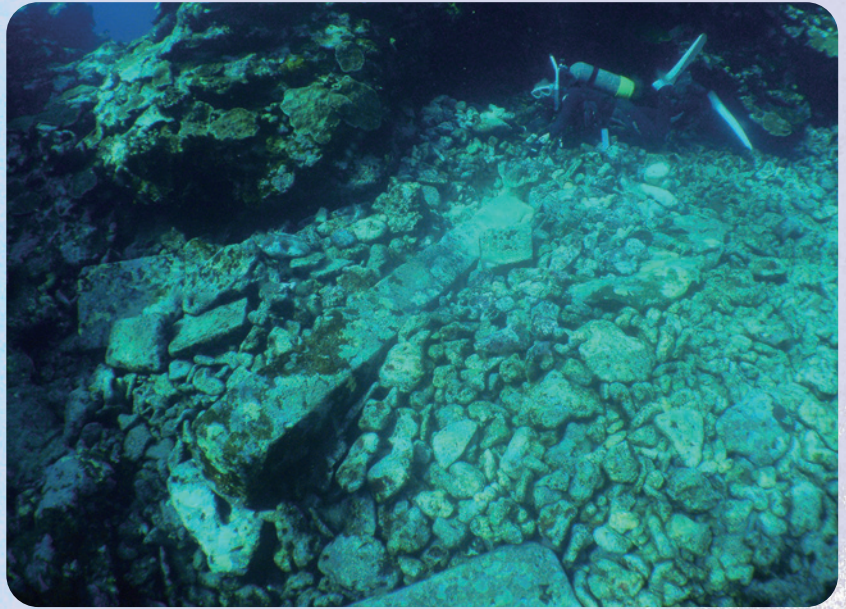
石材1

方柱状の石材です。リーフの中や外に散布している状況が確認できました。建築資材として運搬されていただけでなく、船を安定させるバラスト（重り）としての役割も兼ねていたと考えられます。

石材2

写真中央の石材は、確認できた中でも最大級の大きさで、長さは約3.2mあります。大きな船に積載されてきたことが想像できます。

周辺にも多くの石材が集中して確認できました。



石材3

多くの石材が確認できましたが、他にも砂や砂利に埋まっているものが多数あると考えられます。



銅製品

釘穴が無数に空いている銅板が確認できました。船体を補強する部品の一部と考えられます。また、変形した状態であることから、座礁時やその後の台風等の影響によって繰り返し強い衝撃を受けていることが想像されます。



八重干瀬沖

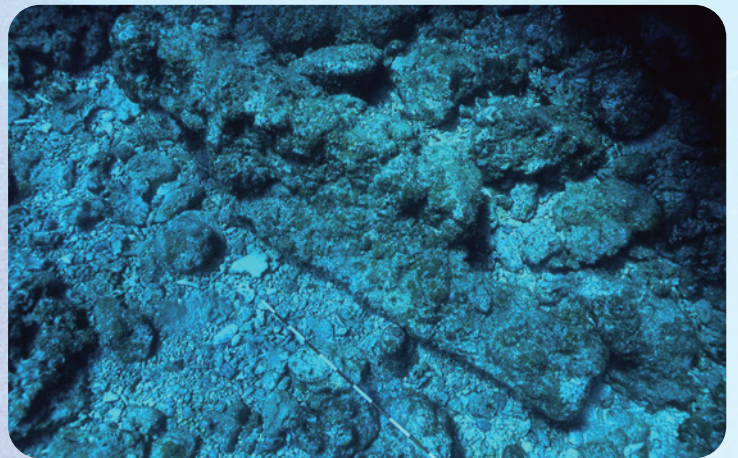
八重干瀬は、宮古島の北に位置する巨大なサンゴ礁群です。ダイビングやシュノーケルポイント等として有名で、「幻の大陸」とも呼ばれています。文献には、1797年5月17日に宮古多良間島沖で英国軍船プロビデンス号（船長名：ウィリアム・ブロートン）が座礁・沈没した記録がありますが、八重干瀬がその現場ではないかと考えられています。池間島にはプロビデンス号の復元模型や八重干瀬から引き揚げたという鉄製品が保管さ

れていました。

海底調査を実施したところ、船の残骸や遺物が確認できました。遺物の種類には、中国産陶磁器、ガラス製のワイン瓶・角瓶、角釘、船体の部品と考えられる鉄製品・銅製品などがあり、西洋船だったことが想像されます。回収した船体の部品（P9十字状の銅製品）にはシンボルマークが刻まれており、これが池間島の鉄製品にも見られるという驚きもありました（P24参照）。

鉄製品

方柱状の鉄製品が集まっています。池間島に保管されているものと同じものである可能性が高いです。



中国産青花 1

中国産青花碗です。破片ですが、時期を特定する手がかりになります

ガラス製の角瓶を発見

ガラス製の角瓶です。割れた部分が丸くなっていることから、何年も海底で摩擦を受けていたようです。瓶の中には何が入っていたのでしょうか。



ワイン瓶

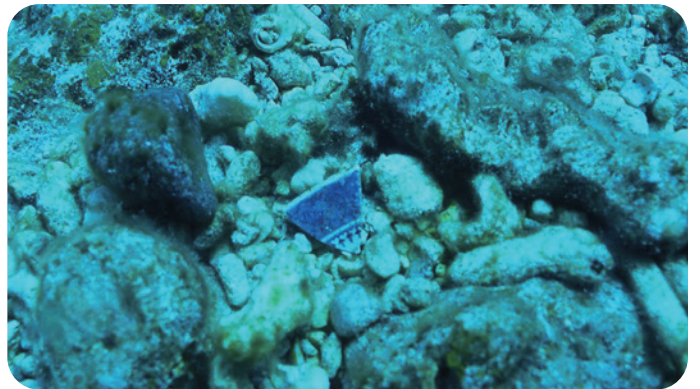
ワイン瓶の底部です。中央の大きな丸い窪みがワイン瓶の特徴です。ガラスの中に大小様々な気泡が見られます。



環状の銅製品

船体の部品と考えられます。他にも同様な製品が数点確認できました。

中国産青花2
小破片ですが、時期を特定する手がかりとなります。



銅製の角釘

銅製の角釘です。船体を補強する部品を取り付けるために使われていたと考えられます。

十字状の銅製品
船体の部品と考えられます。四方の突起部には釘などで固定するための穴があります。また、突起部にはシンボルマークが刻まれており、池間島の鉄製品（p 24参照）との関連を窺わせます。



来間島沖

来間島は、宮古島の南西に位置する小さな島です。海岸で16世紀前半と考えられる中国産陶磁器が多数確認されました。海底調査を実施したところ、海底にも多量の陶磁器が散布する状況が確認できました。陶磁器は青花を中心とし、青磁・白磁・褐釉陶器等がありました。琉球王国華やかなりし頃、中国・琉球間は多くの貿易船が往来していました。この時期の沖縄県内の陸上遺跡では

数多くの中国産陶磁器が出土することから、頻繁な交流・交易が証明されています。しかし、その中には天候や潮流、海底地形などの影響により、座礁・沈没や積荷の投棄を余儀なくされた貿易船もあったはずで、この遺跡の発見によって、当時の航海には様々な困難があったことが想像できます。

来間島西岸遠景

海岸から沖に向かって、広範囲に中国産陶磁器が散布していることが確認できました。



中国産青花 1

海岸に漂着した中国産の青花皿です。内面には十字花文が描かれています。

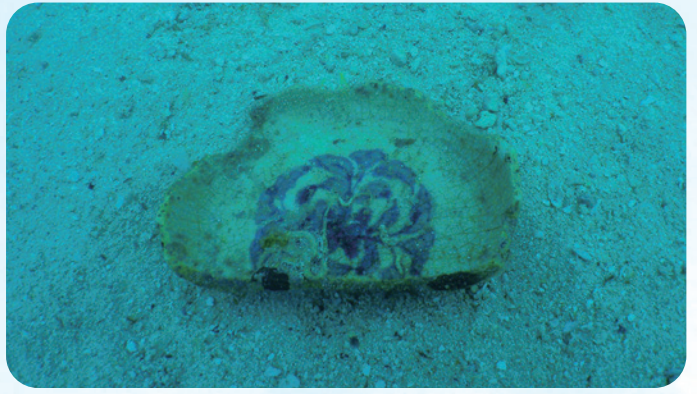
中国産青花 2

中国産青花碗です。外面にきれいな文様が描かれています。一部欠けていますが、摩耗をあまり受けておらず、良好な資料です。



中国産青花3

中国産青花皿です。内面には大きな花文が描かれています。附着物が少ないことから、最近まで砂に埋没していたことがわかります。



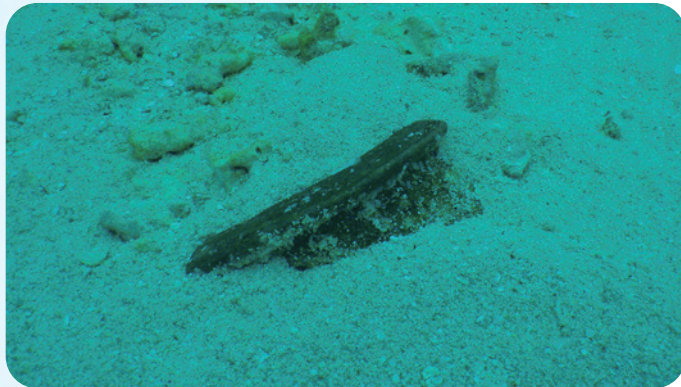
中国産青磁1

中国産青磁碗です。外面には細連弁文が描かれています。欠けている部分が摩耗を受けて丸味を帯びています。



中国産青磁2

中国産の青磁香炉です。複数点確認されました。



中国産褐釉陶器

中国産褐釉陶器壺です。大型の壺類も積んでいたことがわかりました。



潜水調査風景

潜水調査では、遺物が確認できた場所に目印をつけ、遺物が散布している範囲を調べます。

竹富島沖

竹富島沖の海底から、近世・近代の沖縄産陶器が多量に散布している状況が確認できました。種類は、甕・壺・碗・急須などがあります。また、中国産青花皿も確認できました。この遺跡は、沖縄本島で生産された陶器類を積んだ船が八重山諸島で海難事故に遭い、形成されたと考えられま

す。本遺跡が所在する珊瑚礁は地元漁師の人達によって、以前から「カーミワリ（甕が散乱しているという意味）」という名称が付けられていました。間取調査によって確認できた遺跡のひとつです。

竹富島沖遠景

竹富島の南東沖です。眼前に見える島が竹富島です。近世・近代の沖縄産陶器が多量に確認できました。写真からも分かりますが、水深が浅い場所です。



遺物散布状況

とても流れが早い海域です。

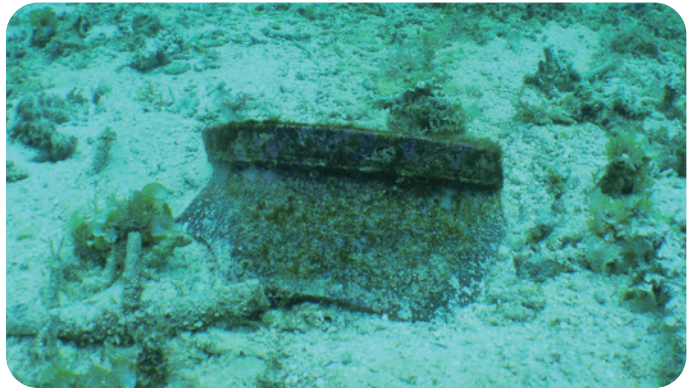


沖縄産陶器 1

沖縄産陶器碗です。付着物が多く分かりにくいですが、灰色の釉が施されています。

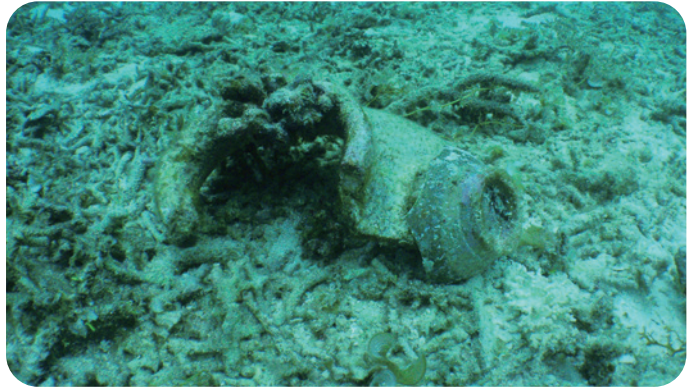
沖縄産陶器 2

沖縄産陶器甕です。大型の陶器が数多く確認されたことから、大きな船に積載されていたことが想像できます。



沖縄産陶器 3

周辺にも多量に遺物が散布しています。



中国産青花

中国産青花皿です。一部欠けてはいますが、全体の形がわかる資料です。内面には「志在書中」の文字と、人物画が描かれています。



遺物確認作業風景

砂の中に半分以上埋没しているものもあり、砂を払って遺物を確認しています。

位置記録作業風景

連携を取りながらGPSで位置記録を取得しています。

黒島沖

黒島沖海底からは多数の沖縄産陶器が特に密集している状況が確認できました。また、密集した遺物群の近くからは、木造船と考えられる船体の一部も確認できました。ヤンバル船等が積荷を載せた状態で沈んでいる可能性があります。

今後の詳細な調査により、当時の八重山諸島を往

来していた船の形や沖縄産陶器の運搬状況などを知ることができる重要な遺跡になるかもしれません。

黒島沖遠景

眼前の平らな島が黒島です。ブイ（浮き輪）の下には沖縄産陶器が密集しており、木造船の一部も確認できました。

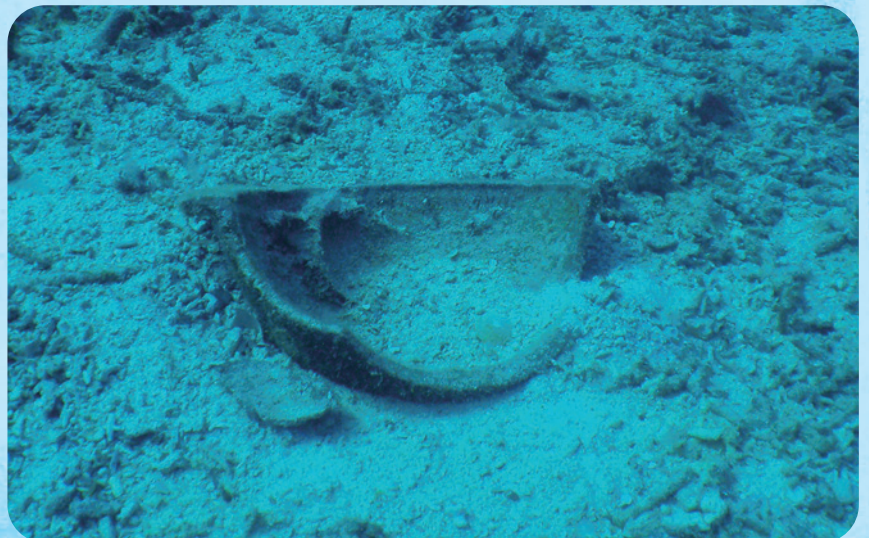


沖縄産陶器 1

沖縄産陶器の碗です。白化粧が施されています。残りが良く、藻や石灰が付着していることから、海底で岩の隙間にはまり込み、長い間露出していたと考えられます。

沖縄産陶器 2

沖縄産陶器の播り鉢です。一部欠けてはいますが、上の写真と同様に残りが良い資料です。藻や貝殻が付着していることから、長い間海底に露出していたと考えられます。



沖縄産陶器 3

沖縄産陶器壺の口縁部と胴部です。周辺にも多く確認されました。



沖縄産陶器群

沖縄産陶器が密集した状態で確認できました。種類は、碗・播り鉢・壺の3つです。まだ砂の中にもたくさん埋まっています。



木造船の一部

船体の一部が確認できました。近くから沖縄産陶器が密集して確認できたことから、これらを積んだ船がそのまま沈んだ可能性が高いと考えられます。



多良間島 高田海岸沖（ファン・ボッセ号の座礁地）

高田海岸は、多良間島の北西部に位置します。文献には、1857年7月18日にオランダ商船が漂着・座礁した記録があります。この船は、金田明美氏の日・蘭文献史料調査によって、上海からシンガポールに向かう途中で難破したファンボッセ号（船長名：W.E.ハーゲマン）であると確認されています。この船に関連すると考えられる陶磁器類が高田海岸に散布しており、資料館でも見るこ

とができます。また図書館前には鉄錨も展示されています（p25参照）。

海底調査を実施したところ、ファンボッセ号に関連すると考えられる多量の遺物が確認できました。文献資料、漂着遺物、海底遺跡を関係させることができる貴重な事例です。遺物には中国産青花・銅製品・バラスト（石）等がありました。

高田海岸遠景

左奥に2つの岩が見えますが、その近くの海底で遺物が確認できました。このあたりで座礁したと考えられます。



銅製品

円盤状の銅製品です。中央に円形の穴が空いています。



中国産青花1

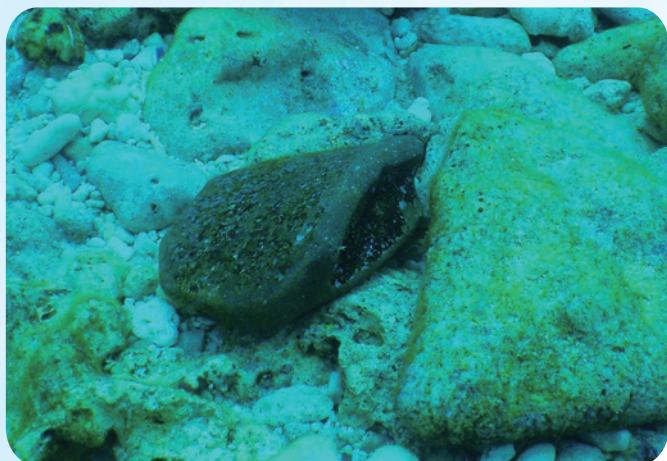
中国産青花皿です。絵付けが消えかけており、割れた部分が丸くなっていることから、海底で何度も摩擦を受けていたようです。



中国産青花2
中国産青花皿です。この遺物も
かなり摩耗しています。



中国産褐釉陶器
このような陶器類も確認されました。



銅製品
用途が特定出来ない破片資料
も多く見られます。



銅製の船釘
木造船に使用する巨大な船釘です。



石のバラスト
海上で船体を安定させる重り（石）
です。重い積荷がある場合は不必要と
なりますが、軽い積荷しかない場合
は、このような小型の石を多量に積載
していました。



南浮原島沖～沖縄本島編補足～

うるま市勝連の沖には南浮原島という小さな島があります。その海底に船体の一部や近世・近代の遺物が確認されました。その内容は、船体の一部、中国産陶磁器・ガラス製品・バラスト（石）、鉄・銅製品等があり多種多様です。外国船が座礁・沈没して形成された遺跡と考えられます。船の国籍等詳細が不明なため、今後の課題です。以前から知られており、聞取調査によって場

所の確認ができた貴重な遺跡です。

この周辺は、岩盤が海面近くまで突き出た地形が多く見られることから、船が座礁しやすい環境だったと考えられます。

南浮原島沖遠景

眼前の島が南浮原島です。海底には、船体の一部や遺物が確認されました。



船体の一部 1

鉄と考えられる物体に棒状の突起が2つ出ています。船体の一部と考えられます。

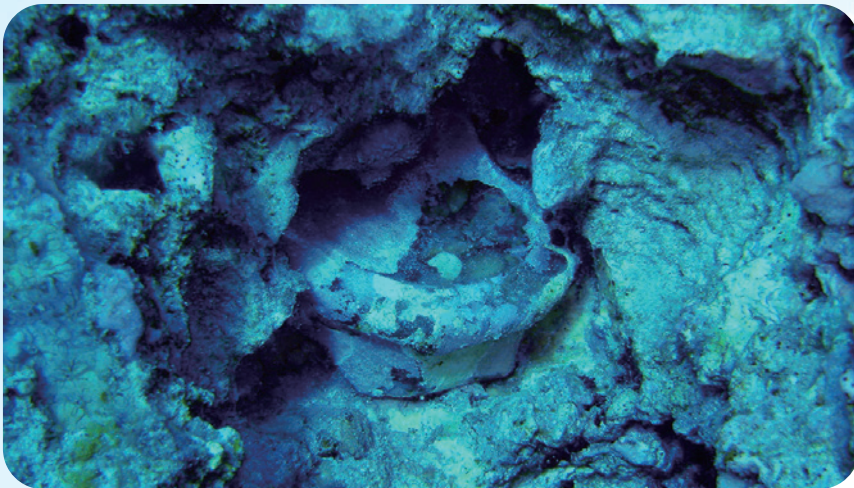
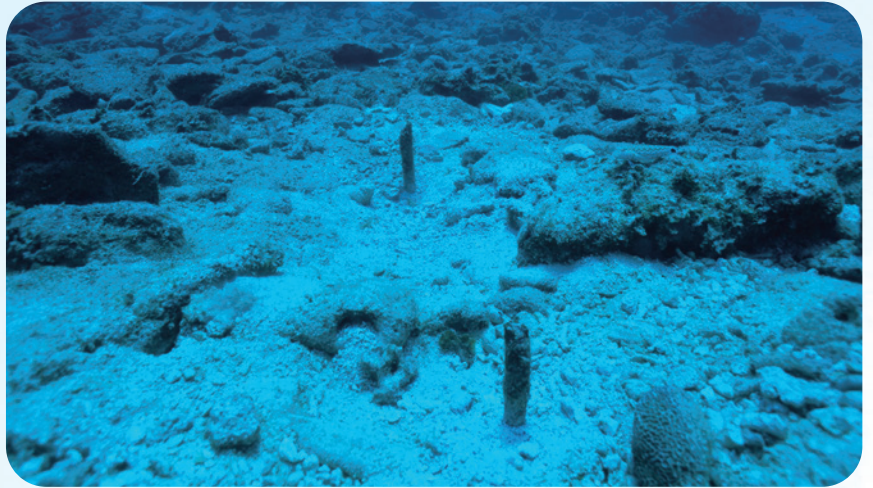
船体の一部 2

木製です。板状で細長く、船体の一部と考えられます。



船体の一部3

海底から船釘が2本露出しています。砂の中には木製の船体が残っていると考えられます。

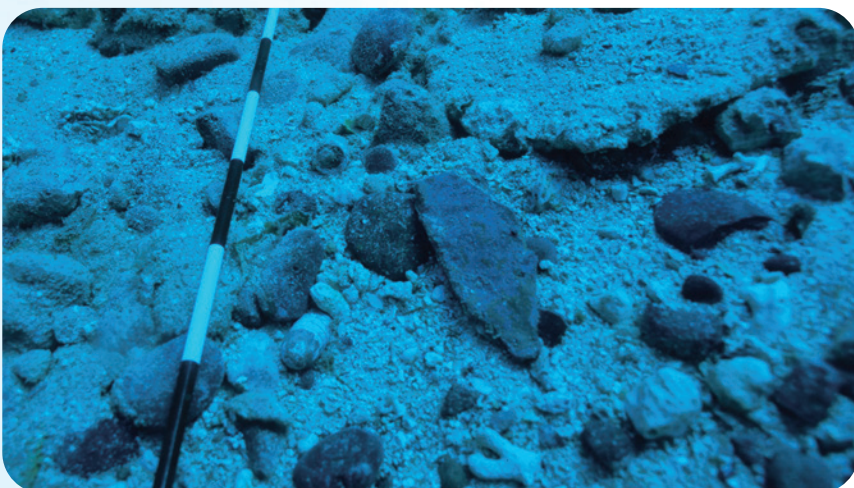
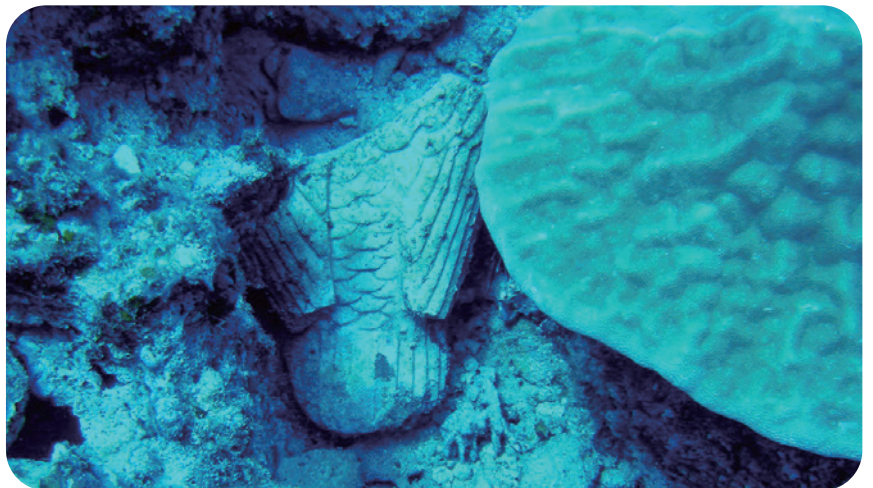


ガラス製の瓶

透明なガラス製品です。岩盤の隙間に挟まった状態で確認されました。

鳥の装飾品

鳥を模した装飾品です。これも岩盤の隙間に挟まった状態で確認されました。



石のバラスト

船体を安定させる重り（石）として使用された黒い小石群です。多量に散乱しています。画面中央左下にみえるものは弾丸でしょうか。

生産遺跡

先島諸島の沿岸では数多くの生産遺跡が確認できました。建築物等に使用する石材を切り取った場所である石切場跡、潮の干満の差を利用して魚を獲る魚垣跡等です。

石切場は、海岸部でビーチロックが形成されている場所に良く見られます。四角状に切り取られた跡が残る風景は独特な景観を形成しています。

魚垣は、海岸の一部を石積みにより囲む形が一般的です。満潮時には囲まれた部分に魚が入って

きて、干潮時になるとその魚が石積みの壁に遮られ、出られなくなるという仕組みです。最後は網などで捕獲するといったシンプルな漁法です。現在は使用する人がいないため、どんどん消滅しており、危機的状況と言えます。

この他にも生産遺跡としては、塩を生産する場所である塩田跡等がありますが、今回の調査では確認することができませんでした。

西表島野原崎南方の魚垣跡

西表島の魚垣に関しては、沖縄県立博物館による西表島総合調査報告書で詳細に調べられています。現在では海岸に容易に近づけませんが、陸上からその光景を見ることが出来ます。





小浜島南岸の魚垣跡

小浜島の北西海岸から南にかけて数多くの魚垣跡が確認できました。これだけ多くの魚垣が残る場所は珍しく、歴史的景観を良く残しています。



伊良部島の魚垣跡

下地島から伊良部島にまたがる魚垣です。市の有形民俗文化財に指定されています。

大浦湾北方の石切場跡

大浦湾は宮古島の北側に位置します。長方形に切り出した跡が確認できました。



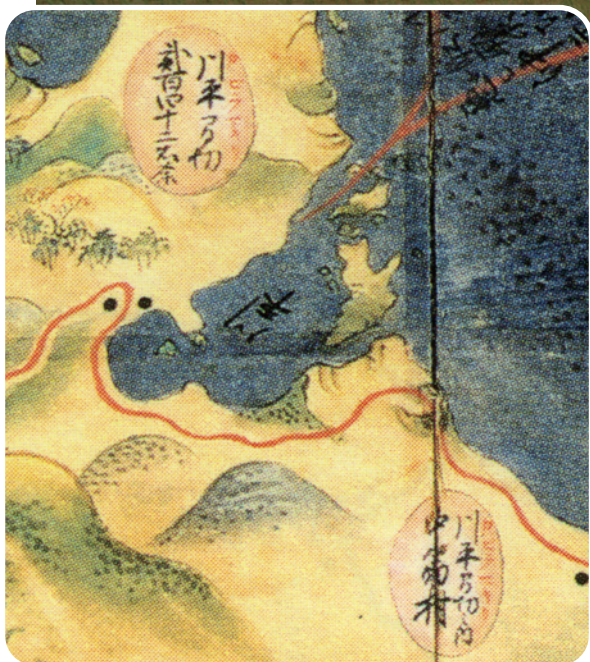
古い絵図や文献に残る古港

沖縄には古くから利用されていた重要な港が数多くあります。すでに使われていない場所もあれば、現在でも沖縄県内の島と島、沖縄県と本土及び外国とを結ぶ港として利用されている場所もあります。今回の分布調査は、先島諸島内で古くから利用されていた港の現状を把握する目的もありました。

主に参考とした資料は『正保国絵図』です。1644年に江戸幕府三代将軍である徳川家光の命によって諸国の大名が献納したものです。したがって、17世紀にはすでに港として利用されてい

た場所を中心に調査しています。また、島と島を繋ぐ拠点として多くの船舶が集まった港には、積荷や不要物の投棄等によって、当時の遺物が残されている可能性もあり、海底の埋蔵文化財を確認する手がかりとなります。今回の調査でも、実際に陶磁器等の遺物が確認できた場所があります。

重要な港ほど現在も利用されており、調査が難しいのですが、すでに利用されていない港の場合は、歴史的な景観を良く残す場所となっています。



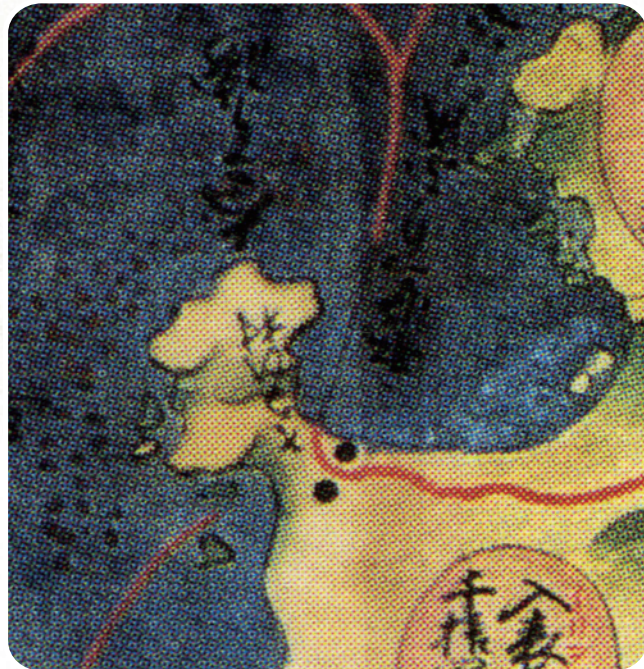
川平湾

川平湾は、石垣島の北西部に位置します。現在は国の名勝に指定されており、歴史的な景観を良く残す場所です。風や波の影響が少なく、船の停泊地として最適な場所だったと考えられます。

マエドマリ（祖納半島南岸）

マエドマリは内離島・外離島に囲まれた場所でもあり、風や波の影響が少なく、船の停泊地として最適な場所だったと考えられます。海岸や海底にはグスク時代から近現代に至るまでの

多くの遺物が散布しており、長期に渡って船の往来や人の利用があったことが窺えます。近くには15世紀から18世紀頃の集落跡と考えられている上村遺跡があります。



宮良湾

『正保国絵図』には港として載っていない場所です。しかし、湾周辺にグスク時代から近世・近代の集落遺跡が多く分布していること、台地上には石垣島を代表するフルスト原遺跡（国指定史跡）もあることから、港として利用されていたと考えられます。それを証明するように、海岸や海底には陶磁器類が散布しています。



中国産青磁

宮良湾海底で確認されました。



陸上で確認できる船舶関連遺物

先島諸島の陸上にも船舶に関連があると考えられる遺物が数多く残されています。海岸で拾われた陶磁器が資料館に展示されていたり、船舶の停泊具である鉄錨や船を安定させるためのバラスト（重り）などが展示物として、または無造作に置かれていたりします。

これらの遺物は海底から引き揚げられたものや、海岸に漂着したものと考えられます。このような遺物の存在は、近くの海域に沈没船等の遺跡があるかどうかを判断する材料にもなります。

今回の調査では、近世・近代の外国船が座礁・沈没し、そこから引き揚げられたと考えられる鉄錨や鉄製品、バラストの役割も兼ねた建築用石材、海岸に漂着した陶磁器などが確認できました。



プロビデンス号の模型(池間島)

鉄製品 1

池間島の池間離島振興総合センター内では方柱状の鉄製品が2点確認できました。2点とも同じ大きさ・形のもので、中央にはシンボルマークが刻まれています。今回、八重干瀬海底で回収した銅製品にも同様な刻印があることから、関連性を窺わせます（p 8、9 参照）。



八重干瀬海底で回収した銅製品

鉄製品 2

宮古島の野原農民研修所敷地内で、方柱状の鉄製品が確認できました。宮国沖で座礁・沈没したドイツ商船ロベルトソン号のものであると伝わっています。盗難にあい、無くなってしまいました。





西洋船の鉄錨

西洋船の鉄錨で、2.5mほどの長さがあります。「オランダカナゲー」と呼ばれており、ファンボッセ号で使用していた鉄錨の可能性が高いと考えられます（p17、18参照）。多良間村立図書館入口前に展示されています。

文字の刻印が見られる陶器

高田海岸沖から引き揚げたと伝わる陶器製の瓶。表面には「AMSTERDAM」という文字が刻印されています（p17、18参照）。多良間村ふるさと民俗学習館内で展示されています。



吉野集落の石材

吉野集落で確認された石材です。吉野海岸沖にはこのような石材が多数散布している状況が確認できました（p7、8参照）。

参考・引用文献

- ・赤嶺誠紀著 1988年 『大航海時代の琉球』 沖縄タイムス社
- ・石垣市史編集委員会 1994年 『石垣市史 各論編 民俗 上』
- ・沖縄県石垣市教育委員会 1977年 『フルスト原遺跡』 石垣市文化財調査報告書第1集
- ・沖縄県教育委員会 1991年 『上村遺跡—重要遺跡確認調査報告書—』 沖縄県文化財調査報告書第98集
- ・沖縄県教育委員会 1990年 『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ—八重山諸島の道—』
- ・沖縄県教育委員会 1991年 『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅷ—宮古諸島の道—』
- ・沖縄県教育委員会 1995年 『生産遺跡分布調査(Ⅰ)—県内生産遺跡分布調査報告—』 沖縄県文化財調査報告書第119集
- ・沖縄県教育委員会 1992年 『琉球国絵図史料第一集—正保国絵図及び関連史料—』
- ・沖縄県立博物館 2001年 『西表島総合調査報告書』
- ・金田明美 2001年 「多良間島沖で難破したオランダ商船ファン・ボッセ号の歴史的考証」 日蘭学会会誌第26巻 第1号 p79-97

調査

平成19年度 片桐千亜紀・山田浩久・比嘉尚輝

平成20年度 片桐千亜紀・山田浩久・小橋川剛

概要報告書

編集 片桐千亜紀

編集協力 金城友香・山田浩久

執筆 片桐千亜紀・山田浩久

デザイン 金城友香

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第52集

沿岸地域遺跡分布調査概報（Ⅱ）

～宮古・八重山諸島編～

発行年 平成21（2009）年3月31日
発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098（835）8752
印刷 （有）潮印刷
〒901-2112 沖縄県浦添市沢岬70番地
TEL 098（878）5666